

企画展「玉里島津家資料から見る島津久光と幕末維新」展示資料 に関する調査報告

市村 哲 二

はじめに

当館は、島津久光を祖とする玉里島津家の資料を同家から寄託されて長く保管してきたが、平成二十七（二〇一五）年三月にその大部分を御寄贈いただいた。その中には、慶応三（一八六七）年十月に出された「討幕の密勅」を始め、幕末維新期の薩摩藩と国内政治の動向について、詳細に窺うことができる資料が豊富に含まれている。今回、御寄贈いただいたことを記念する意味で、表題の企画展を開催したが、展示資料は主に久光が「国父」となって藩政の実権を握った文久元（一八六一）年から、別家である玉里島津家を創設した明治四（一八七二）年までの時期の政治状況に関わるものとした。

本稿では、特に企画展開催の年が薩長同盟締結からちょうど一五〇年を迎える年であることから、特に展示資料の中でも久光と薩長同盟との関わりが窺える資料を取り上げて紹介した。そして、それらの資料を通して、同盟締結に当たり、久光とその周囲の人物たちがどのように関わったか、また、同盟の内容や意義に関して推察されることなどについて、先行研究を基にしながら、企画展終了後も整理した内容を含めて、若干の考察を加えることとした。

なお、紹介する資料については、部分的に引用しながら、それぞれの

資料の後に当時の政治状況並びに薩摩藩と久光の動向などの説明と、筆者の私見などを付け加えた。なお、資料名については、展示の際のキャプションと同一のものとしている。

一 文久・元治期における島津久光と薩摩藩の主な動向

「天皇の命令（勅命）で、幕府に政治改革を求める。」という兄の島津斉彬の遺志を受け継いだ久光は、文久二（一八六二）年三月、兵を率いて上京し、江戸へ出府した（率兵東上）。藩主でもない久光がとつた行動は、当時としては無謀とも思われたが、結果的には、松平慶永（春嶽）を政事総裁職、一橋（徳川）慶喜を将軍後見職に登用させるなどの改革が行われることとなる。その他にも、久光の率兵東上は、周囲に多大な影響を及ぼし、翌年の文久三（一八六三）年においても、久光の動向は常に注視され続けた。

同年の八月十八日の政変で、長州藩などの過激な攘夷派の排除に成功した薩摩藩は、久光が九月に三回目の上京を行い、朝廷、幕府、大名による参予会議に臨んでいく。公武合体、挙国一致による対外的な武備充実及び内乱回避を目指してきた久光にとって、目的実現の又とない機会

であったが、横浜鎖港問題などをめぐる慶喜との意見の対立から会議は紛糾し、成果を挙げることなく解散、久光は失意のうちに退京した。

その後、薩摩藩は幕府と距離を置くようになり、割拠体制を模索し始める。そのような中で元治元（一八六四）年七月に勃発した禁門の変では、勢力挽回を図り上京してきた長州藩を会津藩などとともに撃退し、引き続き征長問題に関与していくこととなった。その一方で、対立関係にあった薩長両藩が、互いに割拠体制を目指していく上で、利害が徐々に一致し始める状況へと変化していく。この状況変化の経緯について、まずは文久三年の薩長両藩の関係に関わる展示資料から、当時の情勢を概観していくことにしたい。

二 文久三年の薩長両藩の関係に関わる展示資料

【展示資料一】

「葛城彦一覚書 文久三年十月付^①」

本資料は、文久三年九月の久光上京前の九州諸藩及び政変後の長州藩の形勢視察を藩から命じられた薩摩藩士の葛城彦一が書き記した覚書である。この中で、薩長両藩の関係に関わる部分は以下の箇所である。

（前略）

一、筑州之世子御上京中国路御通行、長州より願、且薩長確執之姿ニ相成候茂、根を糺候へハ如何ニ茂わけなき事ニ付相解候様御執持

可被下旨筑前侯江頼入之事、

（毛利定広）

一、七卿同道ニ而長門守殿上京之儀、御周旋可被下方より頼入之事、（後略）

この覚書では、長州藩が福岡藩と様々なやりとりをしている状況が報告されているが、この部分ではまず、「薩長確執之姿ニ相成候」との記載があり、政変後の薩長両藩の対立状況に触れている。さらに、「根を糺候へハ如何ニ茂わけなき事ニ付相解候様御執持可被下旨筑前侯江頼入之事」と、福岡藩に薩長両藩の斡旋を依頼していることがわかる。また、それに続く文にも、福岡藩に対して、政変後に京都から下った七卿を同道した毛利定広の上京の周旋を依頼している記載があることなどから、政変後の長州藩の苦しい立場を読み取ることができる。^②

【展示資料二】

「島津久光自記上京日録 文久三年九月から同四年正月まで^③」

本資料は、久光の上京に当たり、その経緯や上京後の動向などを記した日録である。この中で、長州藩との関係が窺える部分は以下の箇所である。

（前略）

廿六日庚午陰西風強シ
一朝五ツ時鶴崎立、八ツ過佐賀関着、今夜殊ニ寒シ、

廿七日辛未晴西北風吹 立冬十月節明六時

一朝四ツ過幕府拝借蒸気船鯉魚門乗船類船都合六艘幕府拝借船二艘順道丸鯉魚門越前船一艘筑前船一艘長崎船一艘今般買入船一艘、七ツ前出船、廿八日曉八ツ半時分芸州御手洗へ碇泊、

廿八日壬申陰

一朝六ツ過御手洗出船、昼九ツ半前備前半島へ碇泊、

廿九日癸酉陰

一朝六ツ過牛島出船、暮前撰津兵庫着、京師ヨリ小松帯刀迎トシテ来り、彼方委細申出ル、大阪ハ浪士等混雜之義有之故山崎通ニ相定ル、併未表向ハ申渡サズ、

(後略)

久光は、文久三年九月十二日に鹿児島(鶴丸)城を出発した。総勢千七百余りの藩兵を引き連れての上京であり、鹿児島を出て、阿久根、出水、佐敷、八代と進んだのは、前年三月の上京の時と同じ行程である⁽⁴⁾。そして、十八日に川尻に着き、九州諸藩や長州藩の形勢に関する葛城の報告を受けた後は⁽⁵⁾、前回の上京行程とは異なり、長州藩の領域を避けた経路を進んでいる。川尻から阿蘇を横断して二十六日に豊後の佐賀関から幕府から借用した船に乗船し、海路にて二十九日に兵庫に到着後、大坂を避けて伏見街道を通り、十月十三日の朝に京都の二本松藩邸に入った。

久光の上京経路は出発前に既定していたものと思われるが、川尻で受けた葛城の報告もある程度参考になったとも考えられそうである⁽⁶⁾。

また、葛城は文久三年十二月二十四日夜に起きた長崎丸事件(薩摩藩

が幕府の長崎製鉄所から借用した長崎丸に対し、長州藩が下関海峡において砲撃した事件)についても後日、詳細を報告しており、これらの報告を受けた当時の久光は、長州藩に対して良い感情を持っていなかったことは明白である⁽⁸⁾。また、このことは、久光が元治元年の二月に、長州の罪状や処分について意見書を提出していること⁽⁹⁾などからも容易に推察される。この意見書などにより、久光は、政変後の参予会議に臨むにあたり、明らかに長州藩に対して、強硬的な姿勢を示していたということが言えそうである。

三 元治元年の久光の動向に関わる展示資料

【展示資料三】

「島津久光宛 長岡良之助(細川護美)書状 元治元年十二月二十八日付」⁽¹⁰⁾

本資料は、熊本藩主細川斉護の三男で、文久期の京都において国事に尽力した長岡良之助が久光に宛てた書状である。元治元年の禁門の変後の第一次長州征討は、長州藩の内情を探索した密偵の報告、建言⁽¹¹⁾や、勝海舟との会談などを経て、厳罰方針を撤回した征長軍参謀西郷隆盛の尽力により、戦闘は回避された。この書状の中で、長岡は久光に対し、戦後の方針について以下のように意見を述べている。

(前略)

大樹公を御進発二いたし、(久光) 各国有志之諸侯參集、第一賢兄・鋭鼻公・(松平慶永)

長面公(伊達宗城)、一橋黄門を輔翼二相成、万事一和、基本を被定、最早異論(慶喜)

有之向は、黄鉞を東西二被秉、兵力縦横之御処置より外有之間敷、

(後略)

書状の中で長岡は、今後、一橋慶喜を補佐して、一和団結の基本を策定すべきであると論じ、慶喜を中心として国を一致させるべきであると述べている。この書状に対する久光の答書草案が次の資料である。

【展示資料四】

「長岡良之助宛 島津久光答書草案 推定元治二年一月付」⁽¹²⁾

(前略)

就而貴君御見込通、再三之御尽力在之度義海山奉存候、尤一橋卿之御心底次第、如何様とも決着相付可申、併書面二而幾度御申立御座候共、去春之形勢を以觀察いたし候得は、大ニ六ヶ敷、いつれ貴君乍御苦勞御登京御尽力有之度義と奉存候、愚拙最早半百ニ近く、腰痛今に不得快氣、力尽之極りニ而、残情不少、貴君は未御妙齡之事御座候得は、死力を出し御周旋奉仰望候、愚拙之及丈ハ乍陰致御輔翼可申上候、

(後略)

久光は尽力したいと言いながらも、「尤一橋卿之御心底次第」と返答しており、この文面からは、元治元年の参予会議崩壊の際の慶喜に対する不信感が、久光の心中に強く残っている様子を窺うことができる。⁽¹³⁾

また、久光は、同じような内容の書状を伊達宗城にも送っていることなどから、⁽¹⁴⁾ 中央政局への関与については、以前に比べると意識が弱まっていることが推察される。

久光をこのような心境に至らせた要因として他に考えられるのは、元治元年八月の黒田嘉右衛門の建言などであり、久光が、慶喜や幕府に対する不信感を強めていったのは自然な流れであった。これがやがて、久光(薩摩藩)の方針を抗幕体制へと変換させていく大きな要因となり、藩地における富国強兵、割拠体制構築に向けた動きへ繋がっていく。加えて、このことが、元来、好意的に見ていなかった長州藩に対する久光の態度を徐々に軟化させ、割拠体制を構築していく上での有力なパートナーと位置づける見方へと変えていったものと思われる。⁽¹⁵⁾

四 慶応期前半の久光及び薩長両藩の動向に関わる展示資料

【展示資料五】

「洪谷彦助宛 坂本龍馬書状 慶応元(一八六五)年閏五月五日付」⁽¹⁶⁾

本資料は、下関に滞在する土佐脱藩浪士の坂本龍馬が、太宰府に謫居する五卿の警護の任にあった薩摩藩士の洪谷彦助に宛てた書状である。

この時期、長州藩は高杉晋作の挙兵により、藩論を「武備恭順」(従う態度を取りつつ、戦いも想定して備えること)に確定させていた。それに対し、慶応元年四月、幕府は諸大名に第二次長州征討を発令したが、西郷は、藩としてこれに従わないことを確認すべく帰国した。この時に、

西郷らに同道し、五月一日に鹿兒島に入った龍馬は、帰国中の大久保利通を含めて、薩長和解のこと、幕府の再度の長州攻めの不義を語った。龍馬は、半月ほど鹿兒島に滞在し、同十六日に鹿兒島を發ち、太宰府を経由して閏五月一日に下関に入った。

書状中の土方楠左衛門は、土佐藩脱藩士の土方久元で、七卿落ち以来、三条実美の衛士を勤めた人物である。岩下左兄は、薩摩藩家老の岩下方平、西吉は西郷吉之助（隆盛）、小大夫は家老の小松帯刀のことである。書状の中で龍馬は渋谷に対し、国元（在鹿の西郷）へ知らすべきことを以下のように伝えている。

（前略）

其後益御安泰奉大賀候、然ハ此度土方楠左衛門上国より下り候、此者の咄、將軍家皆て伝聞の通り既ニ発足、東海道通行軍旅候て、人数五万と申事のよし、一件ニ付岩下左兄早々蒸氣船を以て御国許ニ歸られ、今日十日頃ニハ西吉兄及小大夫など御同伴のよし承り候、夫ニ付てハ私よりハ書状ハ御国へハ出し不申、兎も角も御老の上雅兄よろしく土方楠左より長及時勢被聞取の上くハ敷御国に御伝へ可被下候、先ハ早々謹白候、

（後略）

龍馬はまず、將軍家茂の上洛について、京都から下ってきた土方の話を含めながら伝えている。加えて、当時の長州藩の状況報告を以下のようにならべて記している。

追々

末五月六日桂小五郎、山口より参り面会仕候所、惣分長州の論とハカ（木戸孝允）

わり余程大丈夫にてたのもしく存候、当時小五郎ハ大ニ用られ国論なども取定候事出候よしにて、ともにくよろこひ候事ニ御座候、かしこ、

ここでは、長州藩における武備恭順の藩論確定による状況変化により、藩内での木戸の発言力が増していることを伝えている。そして、これらの情報を西郷に伝えるために書かれたのが、次の書状である。

【展示資料六】

「西郷隆盛宛 箕田新平・渋谷彦助連署報告書 慶応元年閏五月十四日付」

本資料は、太宰府から出されたもので、書状中の三条公は三条実美、大山彦太郎は土佐脱藩士の中岡慎太郎の変名である。龍馬が太宰府に謁居する五卿に拝調したこと、薩長和解に係る長州の事情探索に赴いたことなどが以下のように伝えられている。

一輪呈上仕候、益御安康奉恐賀候、偕此内兒玉直右衛門付添坂本龍馬爰許へ差入、私共江曳合之上五卿方江致拝謁、三条公より安芸守衛被差添、（黒岩直方）

龍馬事、先達而長州江差越、同所之事実探索之廉々御方様江一封を以申上賦ニ而、直右衛門儀当所江是迄滞在為致置候処、此節土方楠左衛門帰府便より別紙相達ニ付、いつれ之筋長防之情実等細々承得、私共より形行書付以御届申上心組ニ而、早速右楠左衛門江致面会旁承得候処、此度蒸氣船より大山彦太郎御国許之様罷下、方今長州之形勢等申上賦承得候

趣御座候間、疾二万端御聞取相成候半、右二付別紙龍馬書面副直右衛門差返申候間、右様御納得可被下候、此段大略如斯御座候、已上、

書状では、龍馬から西郷に報告することを求められたが、中岡が薩摩に行くので子細は彼の報告によることとし、龍馬の書状を同封することなども伝えられている。しかし、これらの情報は、西郷が再上京のために鹿児島を出発する閏五月十五日までに届くには無理があり、このことが桂との下関での会谈予定を変更することに繋がったと考えられる。おそらく西郷は、まだ変わっていない段階での長州藩の姿しか知らなかったと思われ、長州藩の真意を確認しながら慎重に行動しようとしていたと推察される⁽¹⁸⁾。一方で、これらの情報を知った久光は、征討の動きが進む中で、長州藩を潰さずに、有力なパートナーとして位置付ける方針決定に向けての新たな判断材料にしたことも考えられる。そして、久光の方針決定に更に影響を与えたと思われるのが、次の資料である。

【展示資料七】

「島津久光・忠義宛 毛利敬親・広封連署状 慶応元年九月八日付」⁽¹⁹⁾

本資料は、長州藩主の毛利敬親と世子の広封が、久光・忠義親子に宛てた連署状である。土佐藩出身の上杉宗次郎（近藤長次郎）の尽力により、長州藩が薩摩藩名義で武器を購入することができ、幕府との戦争準備を整えられたことに対する礼を述べている。以下が、その全文である。

一書敬呈仕候、秋冷相募候処、愈以御父子様御安健被成御座候御様子、

欣然罷居候、扱昨年中は貴国と彼是不信之次第二立到り、千万御気毒之処奉存候、下拙微志も兎角不行届故、家来之者心得違も有之、大ニ胸痛、今日迄打過申候、然処先年来於征夷府對外夷候所置不行届よりして、人心之動揺二立到、乍恐朝廷御威徳も御衰傾ニ可及と相考、憂歎之余不顧微力致周旋候処、諸事齟齬多く、赤心も貫徹不致而已ならず、今日之場合二立到候次第、何共残念之事御座候、此度貴国江罷出候家来之者より御様子委細致承知、万端及氷解候、於貴国勤王之御正義殊更御確守之由、実以欽慕之至候、皇国之御為無此上と乍陰欣躍致御依頼候、弊藩之義ハ前段之趣二付、日夜朝廷之御様子懸念罷居候而已、心事何も御憐察是祈候、委細ハ上杉宗次郎江咄候間、御聞取可被下候、先は任好便如此御座候、恐惶頓首、

広封

九月八日

敬親

尚々、先日家来之者、貴国へ罷出候節は、彼是御懇切ニ被成下候由難有奉存候、此後も可然致御頼候、以上、

本資料について、先行研究においては、この連署状が「長州藩主から薩摩藩主へ」という最も重い形式で提携を申し入れたものであり、薩長同盟はここに成立したという見方もあれば⁽²⁰⁾、前文で書いたとおり、長州藩が薩摩藩名義で銃器（小銃）を購入できたことへの深甚な感謝の念を伝えた礼状と解すべきだとする見方もある⁽²¹⁾。

いずれにせよ、長州藩主側の「万端及氷解候」の文言にもあるように、このことで藩主レベルでの薩長和解が進んだことが考えられ、久光の長州藩に対する不信感もだいぶ払拭されたように推察される。ただし、この連署状に対しての返信はすぐには出されず、久光が自主的に長州藩主親子に送ったと思われる書簡は、第二次長州征討後の慶応二（一八六六）年十月に出された、長州勝利の祝福の内容のものである。⁽²²⁾このことから久光は、あくまでもこの連署状を長州藩が武器購入ができたことに対して出した礼状として捉えていたとするのが妥当であろう。

一方で、同じ日付で出された久光宛の山階宮書簡⁽²³⁾では、一会桑勢力が朝廷を牛耳っている当時の様子が書かれており、久光は一会桑勢力に対する警戒感を高めつつ、長州藩との関係については、連携・提携の在り方なども含めて熟考していた段階であったのでは、と考えられる。

【展示資料八】

「島津求馬等（側役）宛桂久武書状 推定慶応元年十二月二十六日付」⁽²⁴⁾
本資料は、京都から薩摩藩国元に出された家老の桂久武の書状である。書状の中で桂は、国元で久光から命じられた「御趣意」に在京藩士全員が同意した、と伝えている。以下が、その部分である。

（前略）

十九日爰許到着仕候、扱被仰付候 御趣意、早速打寄演舌いたし候処、一統異論も無之、恐入承知仕候間、此段 御安心之為、乍荒増申上候間、

（後略）

この「御趣意」については、久光が、在京藩士の幕府に対する強硬路線を阻止するために桂に対して出した指令と推測する見方がある。⁽²⁵⁾資料の年代が推定とされているため、単純に比較はできないが、慶応元年のこの時期は、別の資料を見ると西郷を中心とした対幕強硬派の言動や行動が他藩の人物からも警戒視されていることが分かる。慶応元年十二月十七日付で伊達宗城から久光に対して送られた書簡⁽²⁶⁾の中で、宗城は「近日頗暴論二西郷始変化之由」として、西郷を中心とした一派を、対幕強硬派（拳兵路線）として捉えている。それに対し、宗城が一方で「尤被為於 両明公、御依然持重卜心得候」とし、両明公（久光親子）についてはあくまでも「持重」した態度を持ち続けていると見ている。⁽²⁷⁾また、時期は少し遡るが、同年九月に西郷が江戸藩邸の人員削減を計画したことにに対し、久光はこれを西郷の独断専行として機嫌を損じた、ということがあった。⁽²⁸⁾

以上のようなことから、当時の久光が西郷らの対幕強硬派の行動を警戒していたことは明確である。また、封建制度の存続を重視した久光が方針として抗幕体制を考えていたとしても、武力討幕について意識していたかを窺い知ることは、困難な面がある。よって、久光が薩長の連携についてどの程度まで考慮していたかを考えることは、同盟と其後の薩摩藩の動向を考察していく上で、極めて重要なことであると思われる。そして、久光の意向を考える上で注視すべきなのが、家老小松帯刀の動向である。元治元年の参予会議崩壊による久光の退京後、京都の中央政局の中で、薩摩藩の総責任者であったのが、久光から絶大な信頼を受けていた帯刀であった。帯刀は、禁門の変の際に、一橋慶喜に協力して薩摩藩の指揮をとり、慶喜からも大きな信頼を得ることが出来た。また、

幕閣や諸藩、近衛家をはじめとする公卿の間を巧みに周旋し、政局に多大な影響力を及ぼしていた。その帯刀の当時の動向が窺える箇所が同資料にあるので、以下、その部分を引用する。

(前略)

過日柴田藤五郎より申出候趣も有之、一橋江小松家御召相成、又会津より頼二相会度など様々手を廻し、小松家二ハ先日取合相成候処、至極相喜び合掌して相謝候位かた／＼思ひ合候得は、奸策二も無之、幕ハ勿論一・会辺二おるても策なふして、実二尽力を願ひ候形二相見得、

(後略)

禁門の変後、長州征討問題については、江戸の幕閣と一会桑勢力との間では、処置の在り方等を巡って意見の相違が生じた。その背景には、慶喜に將軍職就任の野望があるとの説が、幕閣の間で広まっていたこと⁽²⁹⁾があり、慶応元年のこの時期になると、両者の関係はさらに悪化の一途を辿っていた。引用した部分からは、幕府と一会桑勢力がそれぞれ帯刀を窓口として、薩摩藩との協調を模索していたことがわかる。その理由としては、薩摩藩の軍事力と諸藩に与える影響力の大きさが大きな要因であったと考えられる⁽³⁰⁾。慶喜は、同年の十二月五日に帯刀を呼び、丁重な態度で懸案事項であった兵庫開港や長州処分について聞いたが、帯刀はどうやら適当にはぐらかしたようである⁽³¹⁾。帯刀は、以前にも、江戸の幕閣との対立を深める慶喜に対し、客観的でやや冷淡な見方をしている書状を大久保に送っており、慶喜から厚い信頼を受ける中で、あくまでも薩摩藩を代表する政治家として臨んでいることは、帯刀の政治姿勢を

考える上で、重要視しなければならない点である。そして、帯刀が常に久光の意向を汲み、それに反しない政治活動を行おうとしていたと推察される事も念頭に置いておく必要がある。

【展示資料九】

「西郷隆盛宛黒田了介書状 慶応二（一八六六）年一月七日付」⁽³²⁾

本資料は、桂小五郎（木戸孝允）ほか八名の長州藩士を同道して上京中の黒田了介（清隆）が、大坂から書き送ったもので、伏見における一行の出迎えの件と護衛の件等、十分配慮あるべきことが伝えられている。黒田は、西郷と龍馬が相談して慶応元年十二月初旬に長州に派遣した密使であり、山口に滞在し、反薩感情の最も激しい奇兵隊などを説き回って誠意を示し、木戸の上京を実現させるなど、同盟実現に向けての重要な役割を演じた。以下、その一部分を引用する。

(前略)

扱、木戸氏儀、実二先生而已偏二被相慕、此説上国相成申候二付、願くハ乍大儀伏見御第へ同伴仕度御座候間、

(後略)

長州再征の動きが進展する中で、薩摩藩側（西郷）が長州藩側との会談を望み、長州側の代表（木戸）がそれに応じて上京することとなる。なお、西郷らが木戸に上京を求めたのは、「己丑丸」（ユニオン号）に関するトラブルを解決するためでもあった⁽³⁴⁾。

本書状からは、危険を覚悟して上京した木戸ら長州藩士を、丁重に迎えてほしいと願う黒田の心境が窺える。(近年、西郷本人が木戸に上洛を要請したわけではなく、黒田が自己判断で動いたとする説も出てきている。)

さて、久光の命を受けて上京した桂久武が、帯刀、西郷などの薩摩藩重役と共に、薩摩藩の要請で上京してきた木戸と京都の帯刀邸(近衛家別邸御花畑)で深更まで話し合ったのが、慶応二(一八六六)年一月十八日である。この日の桂の日記には、「深更迄相咄、国事段々咄合候事」とあり、深夜まで会談が長引いたことがわかる。「吉川経幹周旋記」によると、薩摩藩側が、形だけでも幕府の長州処分を受諾するように勧めたのに対し、木戸はすでに第一次征討で謝罪は済んだものとし、幕府の処分案を拒否し、幕府との戦争も辞さず、とする姿勢を貫いたようである。木戸としては、禁門の変以来、毛利家当主父子が官位停止の措置を受けていたこと自体が「冤罪」であり、薩摩藩がその「冤罪」を晴らすために「周旋尽力」してくれることの確約がどうしても必要であった。しかし、薩摩藩側としては、長州を復権させることには賛成だが、それには順序があり、毛利家は何らかの処分を受けた上で、禁裏に向けて発砲したことに対しての責任をとる必要があると考えていた。その上で官位復旧に向けての「周旋尽力」であったが、木戸は一貫して、その処分案の受け入れ要請を拒んだことで、予想外の強硬論に困惑した薩摩藩側は、交渉の落としどころを見失った。その結果が、一月十八日の桂の日記に記載された状況であると思われる。しかし、最終的には、薩摩藩側が木戸の要求を受け入れて、六ヶ条にわたる両藩の盟約が締結された。

以下が、慶応二年一月二十三日付「坂本龍馬宛書翰」の六ヶ条の部分

を引用したものである。

- 一 戦と相成候時ハ、直様二千余之兵を急速差登し、只今在京之兵と合し、浪華へも千程ハ差置、京坂両處を相固め候事
- 一 戦自然も我勝利と相成候気鋒有之候とき、其節朝廷へ申上、訖度尽力之次第有候との事
- 一 萬一戦負色ニ有之候とも、一年や半年ニ決而潰滅致し候と申事ハ無之事ニ付、其間ニは必尽力之次第訖度有之候との事
- 一 是なりにて幕兵東歸せしときハ、訖度朝廷へ申上、直様冤罪ハ從朝廷御免ニ相成候都合ニ訖度尽力との事
- 一 兵士をも上国之上、橋会桑等も如只今次第二而、勿体なくも朝廷を擁し奉り、正義を抗ミ、周旋尽力之道を相遮り候ときハ、終に及決戦候外無之との事
- 一 冤罪も御免之上ハ、双方誠心を以相合し、皇国之御為に粹身尽力仕候事ハ不及申、いづれ之道にしても、今日より双方皇国之御為皇威相暉き御回復ニ立至り候を目途ニ誠心を尽し、訖度尽力可仕との事

六ヶ条全体を見渡すと、第二、三、四条では「周旋尽力」についてうたっているものの、第一条では明らかに薩摩藩の軍事力支援について書かれている。あくまでも後方支援的な意味合いとはいえ、同盟締結後、実際に薩摩藩は兵の派遣を計画しており、第五条に書かれている一會桑勢力との「決戦」に及ぶ可能性も十分想定されていたと思われる。確かに、「決戦」の語句が、戦闘の意味以外で使われたとも考えられなくも

ない。しかし、当時、中津川の国学者が、薩長同盟に関する情報（黒田が元水戸藩士に語った内容が、京都の同志から伝えられた）として、「西郷が京都で挙兵し、一会桑を踏みつぶそうとする内意がある」ことを記していることなどからも、薩摩藩が戦闘に介入するパターンもありえたわけである⁽⁴³⁾。西郷は、様々な情報収集から第二次長州征討も実戦にはなりえないと想定していたようであるが、対幕強硬派の西郷が果たしてどこまで避戦の考えを固持していたかについては、前述したような自分の内意を腹心の黒田に語っていることなどから、若干の疑問が残る。

ただ、西郷が、あくまでも内意として黒田に語ったのは、久光の意向を気にしていたためであることは間違いないさそうである。文久期以来、常に国内対立の回避を考えていた久光は、西郷らの対幕強硬派の行動を警戒し、桂を派遣して自分の意向を伝えた。その結果、薩摩藩の既定路線（有事の際の禁裏守衛など）の延長上にある内容が木戸との会談でまとめられたが、この内容は、事の次第によっては、薩摩藩が一会桑勢力との戦闘、更には最悪の場合、幕府との戦闘にさえ巻き込まれる恐れもあるものであった。そして、そのような状況を想定したとき、久光の意向から逸脱することは明確であり、同盟に関する資料が薩摩側に残らなかったことも、久光の目を意識したものと考えると、納得がいく面もある。

そして、これらを踏まえて久光に承諾してもらえるように報告できたのが、久光の信頼が厚く、幕府や一会桑勢力とのパイプもあり、京都の薩摩藩最高責任者として同盟締結の最終決断をした家老の小松帯刀であったと思われる⁽⁴⁵⁾。もちろん、このことは推測の域を出ないが、同盟締結後の二月一日に帯刀が越前藩の中根雪江に言った発言で、長州が幕府

の処分令に従わない可能性も十分にありうると伝えていることから、薩摩藩側では、戦争を現実的に想定して、動いてもいた。そして、実際に幕長戦争が開戦すると、前述したような大規模な兵の出兵が計画され、帯刀自身も深く関わり、幕府に対する軍事的圧力をかけることとなる。おそらく、それが久光の薩長連携に対する考え方（あくまでも、薩摩藩は長州藩と共に幕府に対して参戦するのではなく、武力による牽制のみを行う。）に合致していたのではないかと思われる。そのような中で、帯刀が幕府や一会桑勢力とのパイプを保ちつつ、久光の意向に沿った方向性の実現を目指していた可能性は十分ありうると考える⁽⁴⁷⁾。そして、この帯刀の姿勢が、慶応三年十月の大政奉還に向けての最終段階の動向（武力を威力として用い、あくまでも平和裏に政権交代を実現させる）にも少なからず繋がっていったのではなからうか。

【展示資料十】

「芸藩世子宛 島津久光返書草案 慶応二年七月十八日付」⁽⁴⁸⁾

芸藩世子（広島藩世継ぎ）とは、広島藩第十二代藩主となる浅野長勲であり、第二次長州征討に際し、藩主を補佐して幕府と長州の間の周旋に尽力した人物である。本資料は、その長勲から久光に対して送られた書状への返書草案であるが、その一部分を引用する。

（途中略）

扱方今之形勢御慨嘆御同意奉存候、長防御所置二付而は貴藩精々御尽力御座候由伝承仕候処、尚今般貴价之御文二而、詳細承知いたし、御苦慮

之程奉遠察候、遂ニ戦争ニ立至り候義驚駭之次第、諺ニ云喧嘩之座元、
実以御迷惑不一方御事と奉存候、此末如何相成可申哉、愚見更ニ付兼申
候、先は貴答迄如此御座候、頓首、

(後略)

久光は書状の中で、長勲の労をねぎらいながら、幕長間で実際の戦闘
が始まってしまったことについて、「遂ニ戦争ニ立至り候義驚駭之次第」
と嘆いている。「驚駭」とあるように、久光も事前に周囲から開戦の可
能性もある、との情報を得ながらも、内心ではその可能性を低く見てい
たと考えられ、「内乱回避」を重視してきた久光⁽⁴⁹⁾にとっては、受け入れ
たくない事実であつたであろうことが想像される。

おわりに

本稿では、ここまで企画展览展示資料における島津久光と薩長同盟との
関わり及び薩長連携の経過などが窺える資料を取り上げて紹介してきた。
そして、これらの資料を通して、同盟締結に至るまでの、久光とその周
囲の人物たちの動向並びに同盟の内容や意義について推察されることな
どを先行研究を参考にしながら、若干の考察を加えてきた。

薩長同盟については、これまで多くの研究者が論文等で触れてきてお
り、様々な研究成果が発表されてきているが、この時期の薩摩藩の最高
権力者である久光の存在を念頭に置いて論じられたケースはあまりな
かつたようである⁽⁵⁰⁾。よって、久光の動向を主にしながら、様々な資料を

用いつつ、薩長同盟と当時の政局について更に深く考察していくことは、
これからも大事な作業であるように思われる。

また、久光同様、同盟締結に向けての小松帯刀の動向分析などについ
ても西郷隆盛、大久保利通らに比べると、比較的、不十分だった点も見
られる。

そのため、今後、慶応二年一月の薩長同盟締結から、慶応三年の大政
奉還に至るまでの流れにおいて、西郷や大久保だけでなく、久光、帯刀
の動向に更なる分析を加えていくことは、慶応期後半の薩摩藩の武力討
幕に向けた藩全体(対幕強硬派、武力討幕反対派の両派を含む)の動向を再
確認していく上で、非常に重要な作業であると考えている。

註

- (1) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料二(鹿児島県 一九九三年) No.七五五
五六四頁より引用
- (2) 拙稿「資料紹介『文久三年 葛城彦一日記』について」(『黎明館調査研
究報告第27集』所収 二〇一五年 六十八～六十九頁)
- (3) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料二』「久光公上京日録」 七二六頁
- (4) 佐々木克『幕末政治と薩摩藩』(吉川弘文館 二〇〇四年) 二二七頁
- (5) 山内修一『薩藩維新秘史 葛城彦一傳』(葛城彦一伝編輯所 一九三五
年) 四〇六頁
- (6) 前掲「資料紹介『文久三年 葛城彦一日記』について」七十頁
- (7) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料二』No.八三四 六七三頁

(8) 文久四(一八六四)年一月十三日付で、松平春嶽が久光に出した書状
『鹿児島県史料 玉里島津家史料三』(鹿児島県 一九九四年)No.八七〇
一二〇頁)には、「先般於田浦長之攻撃ニ付、趣意承札とか、罪を問ふとか、
貴藩より凡三百人計りも長へ被遣候御届、一橋へ被差出候由致承知候」の記
載があり、当時、長州藩への出兵の画策も行われていた様子が分かる。

(9) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料三』No.九六〇 九六一 一三三二～一三三六頁
(10) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料三』No.一二四一 七五六～七五七頁
(11) 「黒田嘉右衛門ヨリ久光公へノ上書」(『鹿児島県史料 玉里島津家史料三』
No.一一四七 五八三～五八五頁)において薩摩藩士の黒田嘉右衛門(清綱)
は、長州藩征討の次は薩摩藩征討が実行される可能性を久光に示唆している。

(12) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料四』(鹿児島県 一九九五年)No.
一一二七七 六十四～六十五頁

(13) 家近良樹『徳川慶喜』(吉川弘文館 二〇一四年)七十二頁

(14) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料四』No.一二七八 六十五～六十六頁

(15) 町田明広「第一次長州征伐における薩摩藩―西郷吉之助の動向を中心
に―」(『神田外語大学日本研究所紀要 第8号』二〇一六年)二十三～
二十五頁を参考

(16) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料四』No.一三三四 二四七～二四八頁

(17) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料四』No.一三四〇 二五八～二五九頁

(18) 三宅紹宣『薩長同盟』(萩ものがたり 二〇一五年)二十五頁

(19) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料四』No.一三八六 三五五～三五六頁

(20) 高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』(吉川弘文館 二〇〇七年) 二八七
～二八八頁 なお、高橋氏は後文で、「九月八日に成立した薩長同盟は、政
治的・軍事的同盟だった」と定義している。

(21) 家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局―体調不良問題から見た薩長同
盟・征韓論政変』(ミネルヴァ書房 二〇一一年)一一八頁

(22) 前掲 高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』二八八～二九九頁 なお、久
光の書簡草稿は、『鹿児島県史料 玉里島津家史料五』No.一五七五 五十頁に
掲載されている。

(23) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料四』No.一三八五 三五一～三五二頁

(24) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料四』No.一四四八 五一四頁

(25) 前掲 家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局 体調不良問題から見た薩
長同盟・征韓論政変』一三九～一五〇頁 さらに家近氏は同書の中で、薩長
同盟については、慶応二(一八六六)年一月の西郷・桂会談が、この時点で
は討幕を目的とした軍事同盟の締結ではなく、薩長両藩の融和ムードを高め、
長州藩の「冤罪」を薩摩藩がすぐために尽力することを約した盟約的な内
容を話した会談と論じている。

(26) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料四』No.一四四五 五〇六～五〇七頁 な
お、刊行物では「西郷怒罵化之由」とあるが、原史料を確認したところ、「西
郷始変化之由」と解説した方が文意がつながるため、本稿では後者の記載を
とった。なお、宮地正人氏も、『歴史のなかの『夜明け前』 平田国学の幕

末維新』(吉川弘文館 二〇一五年)一四九頁において、同様に記している。

(27) 前掲 家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局 体調不良問題から見た薩長
同盟・征韓論政変』一三三頁

(28) 芳即正『島津久光と明治維新―久光はなぜ、討幕を決意したか―』(新人
物往来社 二〇〇二年)一五二～一五三頁

(29) 『鹿児島県史料 忠義公史料三』(鹿児島県 一九七六年)No.四九一 小
松帯刀報告 元治元年十一月六日付 五九九～六〇二頁

(30) 前掲 家近良樹『徳川慶喜』一二二頁

(31) 高村直助『小松帯刀』(吉川弘文館 二〇一二年) 一二九～一三〇頁
なお、高村氏は、この様子を帯刀が桂久武に伝えた十二月六日付書状を『維新史料編纂会引継本』から引用したとしている。

(32) 『大久保利通関係文書三』二二一～二二三頁 大久保利通宛小松帯刀書状
元治元年十二月十三日付

(33) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料四』No.一四七二 五五九～五六〇頁

(34) 『吉川経幹周旋記四』(日本史籍協会叢書、一九八五年) 三一八～三二三頁
なお、「己丑丸」(ユニオン号)に関するトラブルとは、長州藩が購入の予約をした木製蒸気船(ユニオン号)の所属をめぐり、薩摩、長州両藩の間に生じた問題である。

(35) 家近良樹「特論「薩長盟約の実態について」」(薩長同盟・幕長戦争 一五〇年坂本龍馬記念館・中岡慎太郎館共通図録『薩長同盟・幕長戦争』二〇一六年) 九十二頁

(36) 平成二十八年五月から開催された当館の企画展「幕末薩摩外交―情報収集の担い手たち―」において、当館所蔵の玉里島津家資料である「近衛家別邸御花畑絵図」が、町田剛士学芸専門員によって、初めて公開された。なお、「近衛家別邸御花畑」の現在地などについては、原田良子氏が「薩長同盟締結の地『御花畑』発見」(西郷南洲顕彰会『敬天愛人』第三四号 二〇一六年)の中で、新たに発見された地籍図をもとに論じている。

(37) 『鹿児島県史料集(二十六) 桂久武日記』(鹿児島県 一九七六年) 一二三頁

(38) 『吉川経幹周旋記四』三一〇頁～三二二頁

(39) 「青山忠正「龍馬と薩長盟約」」(『歴史学への招待 佛敎大学歴史学部編』

世界思想社 二〇一六年) 四二頁

(40) 前掲 青山忠正「龍馬と薩長盟約」四三頁

(41) 『木戸孝允文書二』(日本史籍協会叢書、一九七一年) 一三八～一三九頁
(42) 『大久保利通関係文書三』二二五～二二六頁 大久保利通宛小松帯刀書状
慶応二年七月九日付

(43) 前掲 宮地正人『歴史のなかの「夜明け前」 平田国学の幕末維新』
一三八～一三九頁 宮地氏は、本書において、慶応元年十二月二十六日付で、京都の染物商であった池村久兵衛邦則が同志である中津川宿本陣の市岡殷政や間秀矩らの国学者に宛てて出した手紙を紹介している。この手紙には、ひそかに太宰府に赴き、十二月二十四日に帰京した元水戸藩士二名が、池村に語った内容(本文中に記載)が記されている。宮地氏は、この手紙をもって、「薩摩の目的は内戦回避とか長州に幕府の条件を承諾させるといったものではない。一会桑を目標とした明白な攻守同盟・軍事同盟なのである。」としている。

(44) 家近良樹氏は、前掲の論文「特論「薩長盟約の実態について」」において、情報収集活動に従事するため、大坂に下っていた黒田清綱が慶応元年十一月十五日付で西郷に宛てた書簡(『西郷隆盛全集五』大和書房 一九七九年 二四五～二四八頁)を紹介している。その書簡の中で、黒田は幕府の出兵の動向について、「例の婦女子を畏す虚唱と相見得」と、西郷に報告している。

(45) 原口泉『龍馬を超えた男 小松帯刀』(グラフ社 二〇〇八年) 一五二頁
桐野作人「再考 薩長同盟 長州復権をめざす秘密軍事同盟」(『歴史群像 六月号』学研プラス 二〇一六年) 九十一～九十二頁の記載を参考。帯刀や西郷の行動が、もし久光の意に反したものであれば、何らかの処分が下された可能性が考えられる。しかし、同盟締結前後で、彼らが処分を受けた形跡

は、特に見当たらず、このことから当時の帯刀の動向に注目する必要があるように思われる。

(46) 『統再夢紀事 第五卷』(日本史籍協会叢書、一九七四年) 五十四頁、五十七頁

(47) 同盟締結後の慶応二年二月二十九日、帯刀は、西郷や桂久武らと共に京都を発ち、三月十日に帰鹿した。次に入京するのは、同年の十月二十六日であるが、その間、幕長戦争開戦や英国公使パークス来鹿などがあり、帯刀は久光のもとで国元における割拠体制を固めながら、絶えず幕府や一会桑勢力の動向を注視していたと考えられる。また、対幕強硬派の中心的存在であった西郷も帯刀と同じ期間、在鹿していた(久光の意向か?) ことから、結果的に薩摩藩在京藩士の対幕強硬路線(拳兵路線)はおさえられることとなった。

(48) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料四』No.一五二六 六九〇頁

(49) 「久光公ヨリ近衛家へ提出ノ意見書」(『鹿児島県史料 玉里島津家史料一』No.二九八 五四〇～五四五頁) の中で、久光は「清国之覆轍ヲ被為路候御事」と別而恐入奉存候」と建言していることでも分かるように、国内の不統一状態に外国が介入することを非常に恐れていた。久光は、アヘン戦争などの海外情勢について、詳細な情報を入手しており(「唐国戦争一件和解」(玉里島津家資料の中の未刊行史料)、同様の建言が繰り返しなされていることなどから、「内乱回避」は久光にとって、自らの政治活動を進めていく上で大きなモチベーションの一つになっていたとも考えられる。

(50) 前掲 家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局 体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変』一三九頁 なお、近年は町田明広氏の前掲論文などにより、久光及び帯刀の動向を主にした研究が進展しつつある。